

お園のさわり



苧萱桑門筑紫櫟

『守宮酒の段』あら筋

娘の使節に

キモリをのませ

情愛に絡ませ寶を守る

石童丸の家の名寶騷動

筑紫の大名加藤左衛門繁氏は酒杯に散る櫻花に無情を感じ、假睡のうちに、F妻と側室とが互に瞋炎を燃やす髪のもつれを見て發心し、高野の山深くのがれる、

時に豊後の大領大内義弘は、娘と偽り加藤家に傳はる寶石夜光珠を強要する

二加藤家 一の執權監物太

郎は二十歳を過ぎた處女でなければ手を觸れることも出来ないからと、事を構へて断つたが、大内家では、これに相當する多々羅新洞左衛門の娘夕しでを使者として夜光珠を受取りに来るそこで監物太郎は一計を案じ、美男の弟女之助を迎へに出しゑも酒をすゝめて夕しでの心を濁かしてしまふ

二夕しで士 は偽りの黒玉

を渡されるが、も早や何ともいふことの出来ぬ身となつてしまつたので夕しでは自害して申講をする新洞は怒つて監物に詰めよつて見たが、たつた一人の娘が一生に一度の男と知つては心を折れ、名玉も受取らずに立ち歸るといふ筋である



と夫太靱古
郎次友の絃

廿八年振りに上演された

珍らしい『守宮酒の段』
人形浄るり

今夜七時四十五分 大阪文楽座より中繼

四ツ橋^ツの^舞、青柳に風薫る六月の文楽座中
 総 藝 題 は 石 堂 丸 の 真 話 で 知 ら れ た 「 守 宮 酒 の 段 」。 守 宮 酒 の 段 である。
 ▼……これに續く「高野山の段」は歌舞伎を
 初め、その他の音曲で、あまりに有名で
 あるが「守宮酒の段」は、今日では歌舞伎
 にも殆んど上演されず、浄るりとしても
 現存の師匠中、誰一人知る者もないほど
 の廢曲に近い、珍らしい曲である。先代津
 太夫がよく語つたが、文楽座の手摺にか
 かつたのは明治卅九年、攝津大掾が演じ
 たのを最後として今日におよんでゐる
 ▼……今度の上演は、編譯友次郎が秘藏
 してゐる五行本の朱を辿つて復活させたも
 ので、實に廿八年振りに語られる浄るり
 である。語り手は中が文楽の中堅文字太夫、
 切が將來の紋下をもつて目せられる古柳太
 夫、物語の内容はともかくとして、相當注
 目に値する浄るりである

台舞形人樂文
子ツケスの



(筆伯瀧郎二清藤素)